

「孫文・辛亥革命と山田良政・純三郎資料展」

1992年9月26日

名古屋国際センターホール



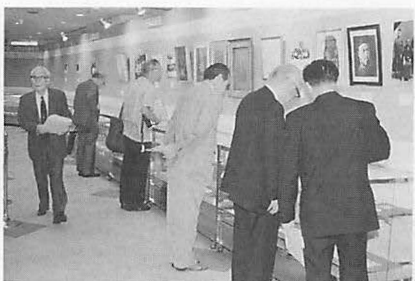
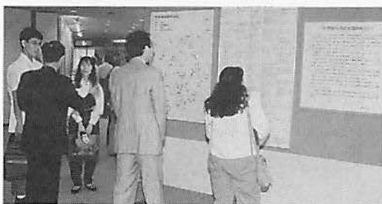
これは1911年辛亥革命を指導して中華民国を創建、その後も引き続き革命の完成のために生涯を捧げた孫文と、彼に深く共鳴し中国革命を援助してついに惠州蜂起で戦死、外国人最初の犠牲者となった山田良政、兄の遺志を継ぎ孫文の側近として活躍し、1925年孫文の臨終に立ち会った唯一の日本人である山田純三郎にかかわる資料である。「革命のために奔走し最後まで怠らなかった」と孫文に言わしめた二人は、近代における日中両国人民の深い友情を象徴するものである。

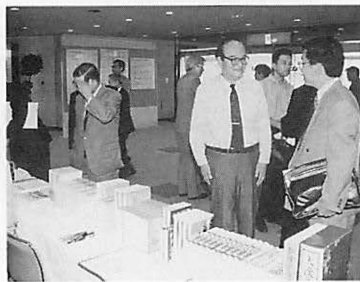
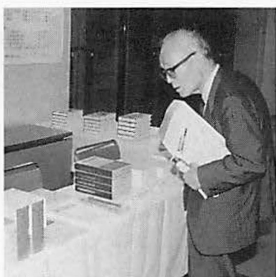
山田家にはこのため孫文ら中国革命の要人の書簡・書画・写真など一千余点の貴重な資料が保存され、純三郎四男の順造は生前これを整理し、父・伯父の事蹟を顕彰しようと努力したが公開に至らなかった。

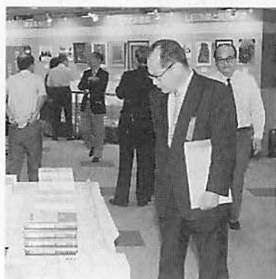
山田良政は近衛篤磨（文磨の父）が日中提携のため1898年創立した東亜同文会の経営する南京同文書院の教授であり、純三郎はここから上海の東亜同文書院に移り第一期の卒業、のち教授となった。順造もその卒業生である。

愛知大学は東亜同文書院大学最後の学長となった本間喜一（愛大第2・4代学長）らが中心となって1946年創立され、いわば東亜同文書院は生みの親とも言うべき存在である。

この縁により資料は愛知大学に贈られ鋭意整理が進められてきたが、日中交流史の一面への理解を深めていただくべく一部を選んでここに展示を行った。









1993.10.16 名古屋 Hilton ホテルで開催された
「交歓会」で挨拶をする
愛知大学石井吉也学長

十月十六日、名古屋ヒルトンホテルで、「愛知大学東亜同文書院大学記念センター発足記念交歓会」を開催した。主に霞山会、滬友会、東亜同文書院大学同窓会、愛知大学関係者と報道関係者が出席し、懇親を深めた。とりわけ、霞山会、滬友会、愛大の三者がこのような形で一堂に会した機会はこれまでに例がなく、今回の交歓会にふさわしい会となった。

会の進行は文学部藤田教授がつとめ、関係者からのごあいさつをいただく形で進行了。まず、石井学長があいさつに立ち、東亜同文書院大学が優れた人材を次々に生んだ教育システムを愛知大学もしっかり継承していきたいこと、また、今回設立した東亜同文書院

大学記念センターを通して、東亜同文書院大学の果たした役割を再評価していききたいことを強調された。

次いで東亜同文書院大学記念センターの運営委員長である今泉教授が、センター設立の経過・主旨の説明を行ったうえ、愛知大学の設立主旨とも合致するセンターの設立が、大学のアイデンティティーにもなるよう努力したいとの抱負を表明された。

また、当日の講演者である日本ベンクラブ会長の尾崎秀樹氏は（計画時に）台北帝大在学中ゆえに愛知大学編入を希望したが、理科系学生であったため入学が出来なかったとエピソードを紹介され、あらためて東亜同文書院の建学の精神の国際性を評価し、愛知大学がそれを生かしていただきたいと希望を述べられた。

霞山会の近衛通隆会長からは、東亜同文書院を支えた東亜同文会の内容、本間学長による愛知大学の設立経過を紹介され、愛知大学と霞山会および滬友会は親子兄弟あるいは祖先を同じくする親戚であり、三者の今後の一層の緊密化を願うご祝辞をいただいた。

また、滬友会からは賀来揚子郎事務局長が、本年はこうなるうれしい予感がしていたこと、また東亜同文書院記念基金が一億五千万円に達し、谷光隆前愛知大学教授ほか二人の方に記念賞を授与されることになったことが報告され、書院の名が後世に残ることが大変嬉しいとあいさつされた。

このあと、伊藤鑑一愛知大学同窓会会長から同窓会としてもセンター設立の精神を継承していききたいとの決意が表明された。そして一同懇親を深めた。

途中で、今回のセンター設立を記事としてまとめられた朝日新聞の由本昌敏氏と、中日新聞の相馬正氏、現在この件を取材中のNHKの福田哲夫氏からのご祝辞をいただき、由本氏は書院の偉大さを知り、書院と愛大を見守っていききたい、相馬氏からは書院を通して教育の原点を知り、愛知大にはまさに知を愛する大学になって欲しい、福田氏からは、天安門事件時に中国に居たことから中国への関心が高まり、今回のセンターの設立にも多大な関心をもっている、とそれぞれ述べられた。

次いで、今回記念出版された小冊子「東亜同文書院大学と愛知大学」の各執筆者である元ルーマニア特命大使の小崎昌業氏、元NHK解説委員の小林一夫氏、元読売新聞社編集委員の釜井卓三氏、文学部藤田教授がそれぞれの執筆意図を開陳された。

出席者一同、それぞれ熱い想いを胸に抱きつつ、交歓会を終了した。ホテルの外は名古屋祭りも真最中であり、内外ともに祝賀気分の盛り上がりであった。